鶴岡市総合計画審議会　第３回企画専門委員会（会議概要）

○　日　　時　　平成３０年６月５日(火)　午後３時３０分から
○　会　　場　　庄内産業振興センター　第１・第２研修室
○　委員発言の概要

『目指す都市像・まちづくりの基本方針』について

・これまでの市民ワークショップで、参加者から共通して出ていた「チャレンジ」という言葉が印象的だった。
・希薄になっている人と人とのつながりも、集合体となれば大きな力となって次の時代に運ぶことができる。鶴岡が地域の共同体として発展していくためには、様々な人々や文化とつながっていくことができるコミュニティの拠点になることが重要である。
・町内会など、地域を中心とした取組を思い描いて基本方針を考えてみた。
・自助自立が求められている状況のもと、除雪や自宅の管理もできない世帯が増えてきた。空き地や空き家も増え､除草の手間や老朽化の危険個所も少なくない｡生活サイクルの中で様々なサポート(支援)の仕組み作りがますます必要である。
・人口減少下において、一人一人がより主体的に動いていかなければならないということを考えると、一人称で都市像や基本方針を考えていけばよいのではないかと思う。
・文化や歴史といった言葉では少し限定的な印象もあるので、より広い意味の言葉として風土といった言葉もよいのではないか。気候だけではなく、歴史や人間の文化形成に影響を及ぼすという意味合いもある。
・言葉を考えるとき、誰にでもわかる、特に子どもでも意味がわかるということが重要である。鶴岡が何を目指しているのかということがわかりやすく伝わることや、誰でも口にできるフレーズであることが必要である。
・市民一人一人、大事にしたいものや背景、目指しているものが違うということも念頭に置く必要がある。
・自分も何かできるのではないか、また、行動を起こしてもよいのだということが伝わる計画にしたらよいのではないか。
・誰が行動するための計画であるのか、何のための計画であるのかが冒頭にくるとよい。
・人口減少下において、ネガティブな考えに陥るのではなく、全国から人が集まり、幅広い年代の人たちが安心して暮らせるまちにしていくことが大切である。
・田舎は田舎らしくていいと思う。機械的な遊び場を増やしただけでは、他の地方都市と変わりがなくなる。
・一次産業は先人が行ってきた土づくりや海づくり、山づくりのバトンリレーであると思う。伝統芸能などもそういうところから始まっている。田畑を見て自然の豊かさを感じるが、それを作った人たちが居たからこそのものであるという思いが根底にある。

・外国人が鶴岡市民として生きていくということを考えたときに、国際化と言うよりも、多文化共生都市と言う方が明確であると思う。
・抽象的な項目とは別に、何か具体的な大きなプロジェクトも取り入れたい。
・時代をひらく志が必要である。進取の精神は徂徠学の精神にもつながるものだと思う。
・生活面では、出羽三山や酒井家などを軸とした歴史と、予防医学や健康予測などの新しい展開を融合させていく必要がある。
・産業面では、自然循環型農業を展開していく必要がある。バイオ産業は自然とニアリーイコールのものであり、農林水産業とエネルギー産業などの分野での起業を促進していくことが大切なのではないか。
・新しいことに挑戦し、誰もが稼ぐことができ、誰もが幸せになるためには、障害の有無や性別、年齢、国籍などと関係なく平等な社会をつくるということで、ユニバーサルデザインの確立が一番の土台ではないか。
・ユネスコ食文化創造都市ネットワーク加盟や食と農の景勝地指定などに象徴されるように、食や農業の資源が豊富である。食は生きていくために不可欠なものであり、生命や生物につながるものであるし、生はＵＩＪターン者の生活も想起させる。食や生といったものを直接的に打ち出している都市は少ないのではないか。
・各委員が考えている共通のキーワードはいくつかあるのではないかと感じる一方で、その背景には多様な方向性も見受けられる。
・誰に向けた言葉であるのか、子どもも対象とするべきなのか、共通認識を持って作業を進めなければならない。
・「地域が生み出す産業の都市」、「いのちを支える食と農の発信都市」、「市民が公益を支える安心のまち」といった目指す都市像・まちづくりの基本方針はどうか。
・新しい産業を市民自身の手でつくり育て、２０年、３０年、５０年後にまちが発展していくようなものを今からつくっていかなければならない。
・食と農の出口は産業であり、それらを世界に発信していく必要がある。
・公共が公益を生み出し、市民や来訪者に安心感をもたらすということも大切である。公共が入口で、安心が出口になるという考え方も必要である。
・事務的なことにこだわることなく、伸び伸びと次の１０年のキャッチフレーズ、目指す都市像を考える必要がある。
・１０年間の計画であることを考慮すれば、次世代を担う子どもでもわかる、学校でも話し合えるような、広い年代に受け入れられるキャッチフレーズが必要である。
・子どもに訴えるという場合に、鶴岡に住む子どもが対象であるのか、あるいは東京、あるいは世界の子どもたちなのかというところも整理が必要である。
・子どもと地域のことを話し合うという機会がなかなか無いと感じる。世界を相手にという考え方もあるが、やはり鶴岡の子どもを対象とする形ではないか。
・民間企業等のキャッチフレーズを見ると、子どもや高齢者にも理解しやすく印象に残る言葉が冠につくとともに、５年、１０年の方向性がセットになっている。

・鶴岡のアイデンティティーを短い言葉で言えればいいと思う。今まで大事にしてきたものを強調しようという視点と、これから何に投資すればよいのかという視点の大きく２つの視点がある。
・過去を象徴するとともに､未来の志向性を含むようなキャッチフレーズが見つかればいいと思う。
・子どもにわかるような言葉でというのは大賛成だが、大人が聞いてもいろいろなことを想像できる言葉であるといい。我々は何を大事にして、これから何を行動に起こして、結果として何を達成するのかという三段階である。各委員の意見を組み合わせて凝縮し、イマジネーションを持てるような言葉に落とし込み、子どもが見ても大人が見てもわかるような言葉で表現する方向性がよい。
・この言葉なら子どもにも大人にもわかるのではないかという言葉を見つけたい。
・人によって言葉の受け止め方は違う。計画自体のことをキャッチコピーにするのか、計画に関心を持たせるためのキャッチコピーにするのか。市民で共有するのであれば、導火線に火をつけるようなものがよいのではないか。
・キャッチコピー自体では具体的なものは示すことができないかもしれない。二段階での構成にして説明を付すことなどが考えられる。説明とキャッチーなものは別物であると思う。
・発信する対象を絞り過ぎない方がよいのではないかと思う。あまり縛らない中で、自由な発想の中でいいものが見つかればいいと思う。その下の部分で次の１０年で大切なことを表現していければいいのではないか。その要素は各委員の意見に入っていると思うし、それ以上に具体的な施策の部分は各専門委員会に任せるとともに、企画専門委員会と情報共有する形で役割分担していければよい。